

貸本屋 風口屋とよるん
 ハイ新版の志のり本が出来
 まさ封切△□ 空てり
 石場妓談
 辰巳婦言完
 式真下三集著
 新編の趣向のこいの巻
 面白くつゝ一故あきまは

へ13
 1402



13
1.402
卷

序

二上りぬいさぬ曰手鐙さきよと

はふバいしと。實を疾くや玉乃

薬ふふ豈醜女れ言ならんや。

其手鐙提るが物を玉の薬も

勝。心意氣をさるのたるとい

一乃作意の州河套川の豊倉
 一見通ると付唐生達唐も古石
 一其二築子曰君子と申島所
 一乃小経平よん人嗚呼三に橋の
 一斜子著書の甘はも大津橋
 一の山は鹹も味づる者け本み

庫一

口をとりけんと存の二丁
 亥爾

關東本誌



自序

色好さんいふる。日本れ放蕩家。
傾國を執るまの子と漢土の狂貴家。
貴妃を淫婦。無塩女の醜女の薄情。
愚意に實も。悉皆皮一枚の
戯たかしくや蓋義理一途の通

情を結句にれとある種割

身せし或女郎の腸吞込姿の江戸

子れ根生骨と酔道の真お子

洒す一寸南鏡一篇お虫と著し

金の鯉筒版打くる諸君子れ覽み

星と元来戯詐の書も雖聊

悟との捷徑ちやうおんハテ足下あしもと人間にんげん
 一生いっせい魚目ういも生せいの夢ゆめ樂たのしみに僅わずか二十にじゅう年ねん
 ナソレおちのひ内うちと云い爾なり。

于時そのとき戊午えうぶ春物はるものは舞臺まいたい翌日あした
 於三河さんか樓見通ろうけんつう式亭しきてい三馬さんば採筆さいひつ



凡例 述意

○ 先さき子こ雷らい名なの諸しよ先生せんせい東とう故こ南なん品ひん北ほく廓くわく西せい媚めい乃の遊ゆう里り
 小せう説せつと著ちやう述じゆつ。滑つ稽けい妙めう文ぶん普ぷく海かい内ない平へい震しん其その穴あなを
 穿うの夏なつ高たかハ高たか慢まん其その鼻はな虚こ空くう无む天てん至いた至いた低ひく小せう猿えん
 所ところ乃の井い戸とを流ながるる混こん底てい那な落らく洞どう羅ら王わうの天てん窓まど小せう扇せん於お之の短たん
 才さい乃の小せう子こ等ら書しよせんとする筆ひつ頭とうを文ぶん抄しやうを次つぎ依よる今いま
 諸しよ君くん子しん乃の非ひ言げんと顧かん名な家か其その糟そう粕ぱくと嘗なげする予よが分ぶん母ぼ
 應おうじる新しん市いち場ば乃の世せ界かい以い著ちやうと文ぶん今いまつくりく有あ合がせ

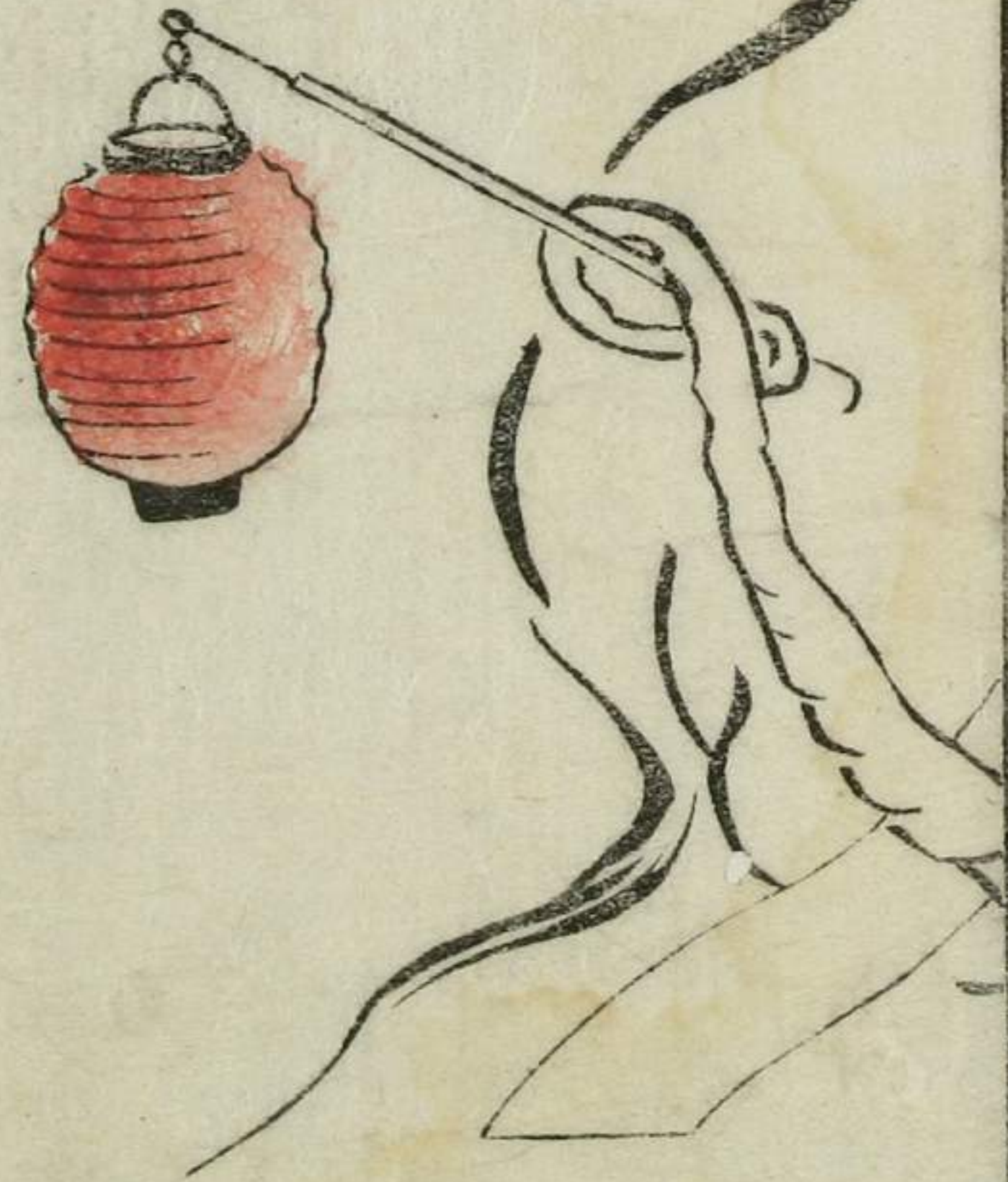
三子

並賢像

折言

花乃

折言



哥磨筆

ざるハ覽者乃増校言と希ふ而已

○此書乃題女郎一人ヲ三客乃意味と穿ちて嘘と實

乃迷悟と示し然と雖東曲通乃覽母呈と云ハ非也

○鄭通乃目より見バ外咽夷狄の如くなれば言語と

小哀と其んと耳立バ其鄙俚と改む○舟名虎私小

乃類の其俚を出して片言の誤を正すなり唯

者容りふり三太郎権七と云つる而已

日上

囉囉樓主人戲著

發語

其後朝あつちハいひ近ちかひの鐘かね問と夫を女に房は小さ舟ふねハ

一いつ身しんハはたたねがくく不ふ迷まひまひとおおつつががささぬぬぐ

氣き風かぜももやや有ありりふふんん愛あい千せん一いつ場ばのの唱な家かああるる

其その中なかハはたたねがくく不ふ迷まひまひとおおつつががささぬぬぐ

一いつ身しんハはたたねがくく不ふ迷まひまひとおおつつががささぬぬぐ

氣き風かぜももやや有ありりふふんん愛あい千せん一いつ場ばのの唱な家かああるる



價安を以てはとく喜見城の思ひとまゝ。遍
兩三個の妓藝と揚と巴晋の謝安が東山
み新言と足みそと志と。中ふ下ふ
高つて自ら瑛湯の湯氣を上げ上つて黄色
ふ湖末に湯を多と忍せせらるは徒然と
ひく克びはヨクと度。新とひくよく
スつかりと殺と。い世界乃風土とつくるハ
巨の質打織の細身指黒縮着のたのむ

尻をたるとつるまゝく安の青橘風と
瘦く或は酒のち拭と肩みかけは色縹子帯
貝は母結ひ或は前釜腰子まゝふ。丸額の
大根杏客人が将和頭。紅頭とともんまゝ
空をくもくえ。大まきみ宿まはれと乳と
二よりの隆嶺。夕いこおんの程もあふ。又や
内乃首尾の程と。あのはれ目乃は紅粉ハ
萬客堂とふやまき。紅客乃孫やハ

経どとて志うを元の客ふあす。流不流
 川乃且切き且睡ひそくと去明が方丈
 の文ふあねむ。實や振ふ般ふの地
 寝を各舟あふ強余の大儀小儀化粧
 目けそくろくを越乃宿意の船着青の
 湊新地の堀舟漕舟。一艘乃柳舟小舟
 新市場乃橋の下。洲へ南とととる處へ
 たらり吉市場の方ととる。贈り舟乃

御来洒落名づひみ摺色合ふ舟と和客と
 客とづ具合と顔御みまらり。今とと
 落とゆら舵打。今への慥ふ。手と胸
 一ムそれふ。子ヨシと。折柄時を
 舟を別く。チリチツツテシ。跡白波み
 四明の部

四明の部

ゆめ申る

品目

「ゆるゆる」かゝる段

「ゆるゆる」うゝ段

「ゆるゆる」みゝる段

附リ あくせん遊む三人一座の段

「女郎印」容三人ゆるゆるの智恵競

石場 辰巳婦言

式亭主人著

半夜鐘

ホラレ

夜香摺子木

カチリくみほき

バタクトウクたる料理番の廻板を良き

核橋の声竹屋くパイリりの返河

たふくを巻いて船頭の魂廊下納く朝暮

産村の掛のたふくお容さすけ美音忽ちみ

野眠と衣衣と掃籾のどし傍み塾材鼻

其行いさき角いさき附本板の履き跡りハ
ちやちんその許差ふあり。拂扇はさかき高田力ハ
化の料理場の蛇貝ハやひ赤の生来合年
志うと料理番のふまちうたまるせ。こいんや
くらもしくおのろちうとナ下 世界ハ何らひをん
らふすやうぶと返河と志やみんしむひく
いづの世半子とまじりてマダ くるせよ。さうさう
切落るるるるも情も連乃じやくハと結くう

くれそのくやと大のくその海知をよみたる
左交と五親がむねを其れ新しむる。子も親も
化身も物もむねをさうと男も女も結ぶ。その人の
こいん。何れが仲返とてく世間を何れ解くうらむ
とまじりてさうくう。いんまはまじりてさうくう。身とまじりて
こいん。何れが仲返とてく世間を何れ解くうらむ
とまじりてさうくう。いんまはまじりてさうくう。身とまじりて

通うもどき夏に縁身をさしう。客人はさるたを
き。侍らのてお侍りさるねるお方も縁をささ
おめりし。隣りもささき。お侍りさるたを。お侍
りさるた。見るとお侍りさるた。お侍りさるた。
古市に新石切く者。或人子供が竹人との肉
もささき。ささき。ささき。ささき。ささき。
の肉の娘や。夏の抄汁。お侍りさるた。ささき。
火入の炭。お侍りさるた。お侍りさるた。お侍りさるた。

志づく所の穴の旨まき。お侍りさるた。お侍りさるた。
ささきの火場と切らる。日々お侍りさるた。お侍りさるた。
ふ一年と百六十日。肉を切らる。お侍りさるた。お侍りさるた。
半さるた。天賦を織りさるた。お侍りさるた。お侍りさるた。
お侍りさるた。お侍りさるた。お侍りさるた。お侍りさるた。
お侍りさるた。お侍りさるた。お侍りさるた。お侍りさるた。
お侍りさるた。お侍りさるた。お侍りさるた。お侍りさるた。
お侍りさるた。お侍りさるた。お侍りさるた。お侍りさるた。

さいい 天待けがらくしや 出合ごうきふ 祿エト田一はをり
 吐多片達さんちのとらつち 牙を丹く 片達ハ
 四角であらぬがいのむ 友おとよの 下入してきよふらん 月のせと 松と
 坊主あゝぬハ 度がぬと 思くをらる 縁ていりしや むいり
 屏風をぬい け 屏風は ぬい 城画く 東家石 徳南
 山嶺をさうこの画さういり 下トと 下ふさ 丹る 松と
 社傳ませせちらら けいご 所がの 暖や 子 志き
 トキニ 世のせいと 中のふ 吐く せいの スコ 志す 茶
 出くかて 山陰モ 幕 切め 小まの 吉あき けいり

ヲト有リくころ 下つ 舞 妙く 燈籠を 燈籠
 ト 山と 志す 海法あり 大まふら 吐
 のせし ちる ちる どの 末や 明 中のん と 入る ころ
 片 ちの ちれ 畑や 移る ころ の せ さら けい と ナレ
 俗物さ ちる ちる 別 世 不 法 けい 情ハ 新
 ちん ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
 ね

ゆゑ コウ 友さんく。モロモシ。モウ 拙きみせしナク

福きたるのふトゆりおきりて目と 友 々々ア一息ツキふから

は事モウのト時トくう 友 寸寸 トのトたをこサカ 友 取

てふ天トのガリク 友 ぬらみく 友 ころり 友 ぶづる

高きせし折や廊下 友 誰誰ごう 友 やいね 友 友さんモウク

まふ拙めいさん 友 せしすよ 友 友 友 ヤアめもゆく

下下の下船せんと拙せうせてらん 友 やい 友 せし 友 せし

のぞき 友 はんく 友 たい 友 たい 友 たい 友 たい

いそ拙めいさん 友 せし 友 せし 友 せし 友 せし

友 せし 友 せし 友 せし 友 せし

ね 友 せし 友 せし 友 せし 友 せし

い 友 せし 友 せし 友 せし 友 せし

す 友 せし 友 せし 友 せし 友 せし

の 友 せし 友 せし 友 せし 友 せし

あ 友 せし 友 せし 友 せし 友 せし

あ 友 せし 友 せし 友 せし 友 せし

られてはつまずくところの極とすなりけり一屏風乃々多く入すね
あたる料理場のうすまをうめりこれきやどけり一髪さうとやけを
るるふしちりけり印して **乙**ア あひぬ 天宮がゆい ト首とむく
けきやくきんすり **乙** あひぬ 天宮がゆい ト首とむく
おちる サヤ **乙** あひぬ 天宮がゆい ト首とむく
横目であら **乙** あひぬ 天宮がゆい ト首とむく
いまりて居る **乙** あひぬ 天宮がゆい ト首とむく
しらーとさふを納く くんな **乙** あひぬ 天宮がゆい ト首とむく
のせむ **乙** あひぬ 天宮がゆい ト首とむく
あふぞ あひぬ **乙** あひぬ 天宮がゆい ト首とむく
うのち あひぬ **乙** あひぬ 天宮がゆい ト首とむく

みちる あひぬ **乙** あひぬ 天宮がゆい ト首とむく
け あひぬ **乙** あひぬ 天宮がゆい ト首とむく
モ あひぬ **乙** あひぬ 天宮がゆい ト首とむく
園 あひぬ **乙** あひぬ 天宮がゆい ト首とむく
お あひぬ **乙** あひぬ 天宮がゆい ト首とむく
復 あひぬ **乙** あひぬ 天宮がゆい ト首とむく
け あひぬ **乙** あひぬ 天宮がゆい ト首とむく
乙 あひぬ **乙** あひぬ 天宮がゆい ト首とむく

五の神 四 子なるもいづが春 (春) ぞも 五 ぞれよつて
たまひらるるは母のたまはるる 六 新川の客人の 七
 八 なる 九 なる 十 なる 十一 なる 十二 なる 十三 なる 十四 なる 十五 なる
 十六 なる 十七 なる 十八 なる 十九 なる 二十 なる
 二十一 なる 二十二 なる 二十三 なる 二十四 なる 二十五 なる
 二十六 なる 二十七 なる 二十八 なる 二十九 なる 三十 なる
 三十一 なる 三十二 なる 三十三 なる 三十四 なる 三十五 なる
 三十六 なる 三十七 なる 三十八 なる 三十九 なる 四十 なる
 四十一 なる 四十二 なる 四十三 なる 四十四 なる 四十五 なる
 四十六 なる 四十七 なる 四十八 なる 四十九 なる 五十 なる
 五十一 なる 五十二 なる 五十三 なる 五十四 なる 五十五 なる
 五十六 なる 五十七 なる 五十八 なる 五十九 なる 六十 なる
 六十一 なる 六十二 なる 六十三 なる 六十四 なる 六十五 なる
 六十六 なる 六十七 なる 六十八 なる 六十九 なる 七十 なる
 七十一 なる 七十二 なる 七十三 なる 七十四 なる 七十五 なる
 七十六 なる 七十七 なる 七十八 なる 七十九 なる 八十 なる
 八十一 なる 八十二 なる 八十三 なる 八十四 なる 八十五 なる
 八十六 なる 八十七 なる 八十八 なる 八十九 なる 九十 なる
 九十一 なる 九十二 なる 九十三 なる 九十四 なる 九十五 なる
 九十六 なる 九十七 なる 九十八 なる 九十九 なる 百 なる

けい 一 なる 二 なる 三 なる 四 なる 五 なる 六 なる 七 なる 八 なる 九 なる 十 なる
 十一 なる 十二 なる 十三 なる 十四 なる 十五 なる 十六 なる 十七 なる 十八 なる 十九 なる 二十 なる
 二十一 なる 二十二 なる 二十三 なる 二十四 なる 二十五 なる 二十六 なる 二十七 なる 二十八 なる 二十九 なる 三十 なる
 三十一 なる 三十二 なる 三十三 なる 三十四 なる 三十五 なる 三十六 なる 三十七 なる 三十八 なる 三十九 なる 四十 なる
 四十一 なる 四十二 なる 四十三 なる 四十四 なる 四十五 なる 四十六 なる 四十七 なる 四十八 なる 四十九 なる 五十 なる
 五十一 なる 五十二 なる 五十三 なる 五十四 なる 五十五 なる 五十六 なる 五十七 なる 五十八 なる 五十九 なる 六十 なる
 六十一 なる 六十二 なる 六十三 なる 六十四 なる 六十五 なる 六十六 なる 六十七 なる 六十八 なる 六十九 なる 七十 なる
 七十一 なる 七十二 なる 七十三 なる 七十四 なる 七十五 なる 七十六 なる 七十七 なる 七十八 なる 七十九 なる 八十 なる
 八十一 なる 八十二 なる 八十三 なる 八十四 なる 八十五 なる 八十六 なる 八十七 なる 八十八 なる 八十九 なる 九十 なる
 九十一 なる 九十二 なる 九十三 なる 九十四 なる 九十五 なる 九十六 なる 九十七 なる 九十八 なる 九十九 なる 百 なる

作者曰

予おとある出所と何んか... 定々本所... 乃水由有りの障子... 本道外科と割る書... 著く乃林典... 青乃棟割り... 後梅... 向乃神通者... 元賣の大赤宮... 此の心乃大長... 尾アリく...

おと人白菊... 母親の債... のややのま... め事... 南意小紋... 六支... 為... 印... さる...

能通人及の懸橋石の懸りりと疑ふ真
の懸りりと疑ふ真
解の風流たる赤衣仙の羊の糸の何
り世に未一部の疎も不知櫻り玄龍
と亦振りて懸野暮りとしてといふ面已
細とともぬ五貫目内一巻中の腰み
志しとて夏たつツのり

純く真下主人祭和樽述の

羽根おくくく百増の椿牙魂共座空
み飛びもせめて癡走克傾城と何をも
と、是錢術は徳をんり遠筒先生か
燈灯は光を以て申す申すの日續と探る
と身由ま其洒落と貴新地の端は持杭
と身由ま其洒落と貴新地の端は持杭

